

はしがき

辻山栄子

新西蘭の魅力は、雄大な自然や人々の懐の深さだけではない。最近では郵政民営化などの行財政改革で日本のお手本として注目されているが、同国は、明治時代から日本にとって「理想の国」だった。明治時代、世界に先駆けて女性参政権の確立や最低賃金法など、社会福祉政策を導入した同国に、日本の理想像をみる人が増えていったという。と、ここまでは 2010 年 11 月 9 日の日経新聞朝刊からの受け売り。近い将来、訪ねてみたい国として真剣に考え始めていたあの国、つまりニュージーランドが、あれから僅か 3 カ月半後の今年の 2 月 22 日に、歴史的な大地震に見舞われようとは……。本当に人生一寸先は闇とは良く言ったものだ。

幸いにして、早稲田大学の学生の中で被災した人はいなかったと聞いている。近頃では、チュニジアに端を発した民主化運動が瞬く間に中東諸国に伝播し、リビアでは激しい内戦が続いている。今この時点でも多くの人々の血が流れているという。しかし歴史に目を転じてみると、人類の歴史の中で天変地異、戦争が起きていなかった時代のほうがむしろ例外であるというのが事実である。我々団塊の世代は、戦後の復興と高度経済成長の中で、何不自由なく平和な時代を謳歌してきた。いまから振り返ると、平和を謳歌していた時代の終焉は 1990 年から始まっていた。湾岸戦争、石油ショック、オウム事件、阪神大震災、バブルの崩壊。そして深刻な不況と地球温暖化。あの平和と繁栄の時代はもはや遠い過去のものになってしまった。今の若者と違って、われわれ団塊の世代は、関東大震災と第 2 次世界大戦という過酷な時代を逞しく生き抜いた親の世代と接して、過酷な歴史を自分のものとして追体験することができていた。無論、学生時代に流行った戦争歌はどこか遠い世界のものとしてしか受け止めることができなかったし、目の前の平和は永遠に続くという錯覚に陥っていた時もあったが、しかしどこかで、やがて来る困難な時代に対する覚悟だけはできていたような気がする。と、最近までは思い込んでいた。

この立派な卒論集を手にしてふと思い至ったのは、今年の卒業生の目には、いまのこの時代と、これからくる時代が、どのように映っているのでしょうか、ということである。混沌とした未来の前で、漠たる不安に駆られている人もいるだろう。しかし、生まれた時にはもう既にバブルは崩壊していたから、むしろ団塊の世代よりはよほど逞しく育っている可能性がある。いまの若者たちは、困難な時代を定常状態と受け止めるしたたかさを、もうとっくに身につけているのかもしれない。もしかすると、うろたえているのは、繁栄の時代に青春を過ごした我々中高年だけかもしれない。いや、そうであって欲しい。

いずれにせよ、はっきりしていることが一つだけある。それは、卒業生たちは一様に若いということ、独り立ちの人生がこれから始まろうとしているということである。若さの特権は、物事を前向きに捉えることができる明るさにある。その前向きさ、明るさこそが、間違いなく困難な時代を乗り越える源泉になる。我々の親の世代が、あの困難な時代を明るく乗り越えて今日の日本の繁栄を築いてくれたように、卒業生たちの明るさが、この困難な時代を乗り越えて、明るい未来を築いてくれると信じている。

幹事長の中島君はじめゼミ生の皆様には 2 年間大変お世話になった。全員参加の精神で、ゼミ生全員が仕事を快く引き受けてくれたお陰で、非常に楽しいゼミ運営をすることができた。ここに記して、感謝の意を表する次第である。

2011 年 3 月 早稲田の杜にて